教科又は教職科目，教職教養課題特講Ⅱ

少年問題を考える

社会科教育講座・川岡勉

１．授業の概要

この授業の目的は，現在の若者・少年問題の現状から出発し，学校とは異なる場で子どもの問題と向き合っている方々の活動から学び，問題解決に向けた意欲・態度や実践的な指導力を育成するところにある。そのため，愛媛県内外の少年問題に関わる専門家や経験者等の講話を聞いて知識・理解を深めるとともに，学生自ら問題解決に向けた対策教育プログラムを構築させる時間を設けている。

到達目標として掲げたのは，(1)少年問題・犯罪の実情について深い知識・理解がある，(2)講師の方々の実践を通して実践的な問題解決を志向する態度がある，(3)少年問題・少年犯罪の解決に向かう実践的な自己教育課題を見いだすことができる，の３項目である。

関連するＤＰは，教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ，適切な対応を考えることができる（思考・判断），自己の学習課題を明確にし，理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる（関心・意欲）である。

受講者は，学校教育教員養成課程の学生が62 名，特別支援教育教員養成課程 3 名，総合人間形成課程 12 名，スポーツ健康科学課程 2 名,芸術文化課程 2 名の合計 81 名であった。学年は３回生が 77 名，4 回生が４名である。授業の構成は，次の通り。

① オリエンテーション
② 少年問題・非行の現状
③ 薬物乱用防止・非行防止教室
④ インターネット犯罪とその対策
⑤ 学校における不審者対策
⑥ 子ども・女性の犯罪被害と対策
⑦ 子どもたちの問題と向き合って
⑧ キッズ・タクティール
（スウェーデンの犯罪被害対策）
⑨ 犯罪被害の支援について
⑩ グループワーク―資料作成
⑪ グループワーク発表（１）
⑫ グループワーク発表（２）
⑬ グループワーク発表（３）
⑭ グループワーク発表（４）
⑮ まとめ

授業の進め方としては，外部講師の講話と学生たちのグループワークを組み合わせた。外部講師として招いたのは，②～⑥は愛媛県警の担当者，⑦は児童自立支援施設えひめ学園の元職員，⑧はスウェーデン人の講師，⑨は犯罪被害者の遺族である。

グループワークでは,「子どもたちの〈問題〉と向き合う教師へ」というテーマで，講話の内容をふまえたプログラム開発・授業案作成に取り組ませた。各グループが取り上げたのは，正しい交通ルールについて知ろう，少年犯罪軽減・撲滅へ向けたプログラム，インターネットに関して～人間関係の在り方，子どもたちを守る〇〇小学校安全マップの作成，まもるくんの家を知ろう！，いじめ対策プロジェクト，異性を思いやる性教育について，特別活動におけるソーシャルスキル向上，児童が抱えるストレスについて，構成的グループエンカウンターを利用した良好な人間関係づくりの授業実践プログラム，ネットいじめの現状とその対処法，少年犯罪～窃盗防止に焦点を当てて～，障がいをもつ子どもも理解できる万引きの定義とその予防，という 13 のトピックであった。

この授業を担当したのは，教育コーディネーターの川岡勉･吉村直道･山本久雄であり，前年度まで積み上げてきたやり方を基本的に踏襲する形で実施した。

毎回の授業後に提出させたミニレポートと，グループワークの発表をもとに成績評価を行った。

２．アンケート結果

最後の授業時に授業評価アンケートをとり，62 名の学生から回答を得た。

まず，この授業は教員にふさわしい資質を育てる上で役にたつと思うかを問うたところ，「とてもそう思う」(45.9%)，「ややそう思う」(49.2%)，「あまり思わない」(１.6%)，「全くそう思わない」(0%)という結果であった。「強くそう思う」(29.7%)，「まあそう思う」

(67.6%)という前年度のアンケート結果に比べると，とても役にたつと答えた学生がかなり増加したことが分かる。判断した理由を尋ねると，教師にとって必要な知識や心構えなどが多く含まれていた，普段の授業では聞けない少年問題を担当する方々の生の声がきけた，プログラム開発に取り組む中で自分たちの視野が広がり新しい知見が得られたなどの意見が寄せられた。

次に，②～⑨とグループワークについて次年度も設けるべきか尋ねたところ，③を除いて「とてもそう思う」と回答した受講生が最も多かった。学生の評価が最も高かったのは⑦（児童自立支援施設の取り組み）であり，約 65%の受講生が「とてもそう思う」と回答している。これは前年度と同じ結果であり，経験を積んだ講師の話が毎年強い共感を呼び起こしていることが分かる。④（インターネット犯罪）・⑤（不審者対策）も印象深かったようであるし，⑨（犯罪被害者の遺族）の話も学生の心に響くものであったとみられる。③のみ「ややそう思う」が最多で，これも前年度と同じ結果で，薬物乱用防止・非行防止教室の取り組みが既に成果を挙げていることもあって，この問題を敢えて強調する必要性が低下しているのかもしれない。以上のことから，アンケートから読み取れる基本的な傾向は前年度とほぼ同じであり，これを踏まえて次年度以降の授業内容を組み立てていく必要があろう。

グループワークも概ね好評で，次年度も設けることに，53%が「とてもそう思う」，42%が「ややそう思う」と回答している。講話を聞いた後に自分たちでプログラム開発・授業案づくりを行ったことで少年問題を授業や生徒指導の中で実際にどう取り扱うか考える機会となったと思われる。その一方で，模擬授業への取り組みが準備不足だった班が多いという声もあった。

この授業に意欲的・積極的に取り組んだかを問うたところ,「とてもそう思う」35.5%（前年度 29.4%，前々年度 13.2%),「ややそう思う」59.7%（前年度 64.7%，前々年度 76.5%),「あまり思わない」4.8%（前年度 4.4%，前々年度 10.3%),「全くそう思わない」0%（前年度 1.5%，前々年度 0%)という回答結果であった。

授業の目的・到達目標に対する各自の達成度について記述させたところ，少年問題に対する考えが深まり問題解決に対する意欲や態度は向上したものの，実践的な指導力の育成という点は不十分であったとする声が多かった。

この授業の改善すべき点を問うたところ，外部講師の講話は聴くだけに終わりがちであり，質問や意見交換の時間を確保するなど双方向的な形にしてはどうかという意見が寄せられた。グループワークについては，準備期間や発表時間が短すぎるという声が少なくなかった。また，教育現場で具体的にどう対応しているかも知りたいという注文もあった。

３．総括

全体として授業の目的にふさわしい構成であり，講話だけでは受け身に陥りがちであるが，学生自身によるプログラム開発を組み合わせることで主体的に考えを深めることができたと思われる。受講生の感想を読むと，いずれも教師として避けて通れない問題であり，自分が教師であったらどう行動すべきか考える機会となった，今後の実習や学習ボランティアなどで子どもとの接し方を試してみたいという声が寄せられた。この授業を受講して直ちに実践的指導力が高まるというのは難しいが，自覚的に問題を考え経験を積み重ねていく上で，その第一歩となったのではないかと考える。

グループワークに取り上げられたトピックをみると，ネット社会が子どもたちに及ぼす影響や，いじめ問題に強い関心があるようである。しかし，それへの対応として示されたプログラムは通り一遍の内容で，十分に掘り下げられたものとは言い難い。社会全体でも容易に処方箋の見いだしにくい問題であるだけに，これらのトピックに比重をかける授業構成にしていくのも一案と言えよう。

前年度に発表資料と報告書の関連が不明確で学生への指示が混乱する場面があった点は，今年度は改善された。しかし，グループワークの準備期間や発表時間が短すぎるという声があることから，発表の手順や方式に関する事前の説明の改善，発表・討論の時間確保など，発表会をよりレベルの高いものにするためにさらなる工夫が必要だと思われる。グループワークと発表会の充実を中心に一層の授業改善を図り，受講生の学習意欲をさらに高めていきたい。